

# グローバル・スタディーズと 東南アジア華僑・華人研究

相沢伸広

## はじめに

華僑・華人研究は、その研究体制の特性がゆえに、歴史、経済、政治、文化、すべてを包括的に理解することを求め、加えて、地理的にも、中国、東南アジア、アメリカと、特定の国／地域を越えて、広域的に理解することを強要する。その意味で、華僑・華人研究は、異なる学問分野を、そして異なる地域の研究を架橋する、「架橋」研究でもあるともいわれてきた（濱下二〇〇六）。本特集の共通テーマである「グローバル・スタディーズ」が、広域の世界のつながりと特定の地域のダイナミズムを架橋する研究のとりくみであるならば、華僑・華人研究は畢竟、「グ

ローバル・スタディーズ」である。その意味で、各大学が地域研究と国際政治の両者を包括する「グローバル・スタディーズ」を研究、そして教育の中心課題にすえるということは、華僑・華人研究にとってはこれまでの蓄積を活かし、新たな研究を先導する好機に他ならない。

華僑・華人研究が「架橋」研究であったからこそ、これまで研究対象が求める枠組みの幅と、個々の職業分化した学問の枠組みとの間には、しばしば緊張感が生じていた。たとえば、ベトナムから紆余曲折を経て、ゴーギャンの右腕となってタヒチに落ち着くこととなった華僑の研究や、中央アジア、インドへとその投資のポートフォリオを広げながらも自国の政治に関与する二代目インドネシア華僑企業家の研究を位置づけようとすれば、既存の東南アジア地域研究や、東洋史、美術史、経営学といったそれぞれの研

究梓組みに窮屈な思いをすることになるであろう。しかしながら、他方でこのようなケースが、国際政治、とりわけリアリズムの研究として収まるかという点、そうとはいえないだろう。華僑・華人研究のなかで、とりわけ中国と華僑の関係、関係史については厚い研究があるものの、その研究が広く中国をめぐる国際政治において大きなインパクトを残してきたとはいまだ言い難い。とりわけ、国際政治におけるリアリズムの分析は、意図的にもつばらの分析アクトーとして政府および国家に焦点を当てているがゆえに、華僑・華人研究が国際政治において、とりわけ中国をめぐる国際政治において根幹を成すこともなかった。

華僑・華人研究はかくして、地域研究のなかに収まりきれず、国際政治のような学問領域にも大きなインパクトを残しきれず、華僑・華人研究という緩やかな受け皿を求めてきた。華僑・華人を研究する者はその内容に応じて、時に歴史研究者として、地域研究者として、または政治学、社会学、人類学者として、執筆する論文や発表する場に応じて、看板を併用してきたのだが、現在「グローバル・スタディーズ」という言葉が研究組織の看板として日本で成立しつつあることは、すなわち、華僑・華人研究にとって、これまでの華僑・華人研究という言葉をより広い器のなかに、移し替える契機となる。したがって、編者より要請された華僑・華人研究と「グローバル・スタディーズ」

についての問いを考えるならば、今後、より広い器のなかで、華僑・華人研究が果たして新たな学問上の飛躍を遂げられるのか、また、華僑・華人研究が、元来その性質から「グローバル・スタディーズ」であったからこそ、今後の「グローバル・スタディーズ」の知的な魅力を左右する柱となるのか、考察する必要が生まれるであろう。本稿が、こうした問いに対する議論の端緒となることを願う。

まずは、以下において、これまで華僑・華人がどのような目的で研究されてきたのか振り返り、続いて現在の課題について検討したい。なお、既存の研究の紹介については、筆者の専門でもあり、そして華僑・華人研究の蓄積の最も厚い、現在の東南アジア地域と関連したものに偏ることを予め断っておきたい。

## Ⅰ 華僑・華人はこれまでどのような 目的で研究されてきたのだろうか

### 1 近代史理解のため

華僑・華人研究の第一の目的は、植民地期以前のいわゆる欧米諸国、また日本の公文書による記録が充実する前の時代、植民地期以前を対象とする歴史研究において、当時

のさまざまな国家、権力、そして地域秩序を理解するうえで華僑・華人は重要なアクターとして研究された。ここでは、この時代の広域の秩序形成の主因として商業ネットワークが注目され、こうしたネットワークにおけるヒト、モノ、文化の「移動」の理解について華僑自身の帳簿や手記、旅行記や各王国の資料、中国の海関などの中国語の資料を通じて、全貌が明らかにされていた。広域地域を移動するさまざまなもののうち、華僑・華人は代表的な移動する人であるがゆえに彼らの動態を明らかにすることは、歴史家にとつての大きな研究目的であり、成果であった。(Reid & Rodgers 2001; Tagliacozzo 2011; 濱下 一九九七)

## 2 植民地経営のため

華僑・華人研究の第二の目的は、植民地経営のためであり、また植民地国家・時代の理解のためであった。植民地政府や東インド会社などが植民地経営のために、既存の経済構造や商業ネットワークを理解し、把握するために華僑・華人はきわめて重要な調査、研究対象であった。「東インド」「南洋」に派遣された官僚や会社員は、既存の商業ネットワークがどこに存在し、どのような仕掛けで機能しているのかを理解することが肝要であり、多くの調査報告書を残した (Furnivall & Graeff 1939; 台湾銀行総務部調

査課 一九一四・陳・南滿州鉄道株式会社東亜經濟調査局 一九三九・東亜研究所・東亜研究所第一調査委員会 一九三九・滿鐵東亞經濟調査局 一九三九―一九四一)。

また、植民地経営にとつて死活問題であったのは人口管理と人材活用であった。植民地経営による急速な人口構成の変化に伴い、植民地経営上、華僑・華人の人口動態、移民同士の関係や、移民と現地の人との関係は、植民地経営の基礎を成す社会要因であった。植民地官僚としては、労働需要を満たすために新たな移民を奨励しつつも、最小限のコストでそれを管理し、植民地社会が不安定化しないよう、新たな移民が反植民地運動の運動員に転化しないよう、監視、監督し、治安を安定させる必要があった。そのためにも、つぶさに華僑・華人の動態、とりわけエスニシティや宗教の属性、現地人との「同化」の程度について把握する必要がある、社会学的調査、研究が多く実施された。この結果、複合社会としての植民地社会の特徴などが明らかにされていた (Furnivall 1939; 南滿州鉄道株式会社東亜經濟調査局・岩隈 一九四〇)。

また、後世には植民地官僚が作成した膨大な公文書、記録を用いた研究が行われ、近代国家形成、端的には植民地国家の理解のために、華僑・華人はその手がかりを示す重要な研究対象となった。とりわけ一九世紀末以降の時代に注目されたのは、植民地社会で形成された複合社会におい

て、植民地政府と植民地社会の間を仲介する華僑・華人の役割であり、東南アジアの国家形成において、華僑・華人はどのような役割を果たしたのかがとくに研究された (Rush 1990; Skinner 1957; 1958; Trocki 1990)。

### 3 独立の政治、ナシヨナリズムの政治理解のため

次に、フィリピン革命や一九一一年の辛亥革命など、二〇世紀初頭のアジアのナシヨナリズムの時代を迎えると、いわゆる政治活動ネットワークへの関心が高まり、革命家、運動家の研究としての華僑・華人研究が求められるようになった。孫文 (孫中山、孫逸仙) に代表されるように、そこで登場する華人とは、反植民地、独立、国際共産主義運動のリーダー、またこうした政治活動のネットワークの一員としての華僑・華人であった。彼らを対象とする研究の中心的な分析対象となったのは、その活動の出版物であった。具体的には、彼らが執筆・編集した雑誌や新聞、小説や手記、手紙を元にしたものや、彼らの政治活動を監視する側が残した資料 (つまりは植民地官僚の残したアーカイブ) であった。これらの資料を駆使して、華僑・華人が果たした、広い意味でのナシヨナリズム、ひいては今日にいたる国民形成における役割についてさまざまな角

度から研究が行われた (Anderson 2005; Chirot & Reid 1997; Hau & Kasian 2011; 後藤ほか二〇〇二)。ナシヨナリズムの時代を迎えるころ、華僑・華人は、まさにそのインターナショナルなつながりを通じて、ナシヨナルな運動を始めるその最前線、またネットワークの結節点にいたのであった。

### 4 開発政策と政治的安定

東南アジアにおいて各国が独立を達成し、政治の目的が、革命や反植民地、独立から、経済開発、生産性の政治へと次第に優先順位がうつると、次第に各国の経済成長の核となる資本家の研究としての華僑・華人研究が増えることになった。ここでは、華僑・華人資本家の経済的成功の理由を明らかにすることが研究上の意義になり、とりわけ、東南アジアで存在感をみせる大企業グループに焦点を当てた研究が (とりわけ日本で) 研究の中心となった (Gomez & Hsiao 2001; Suehiro 1996; 佐藤一九九二・末廣二〇〇六・末廣・南原一九九一)。またこうした大資本家と開発の時代の政治家との関係の権力関係についても明らかにされていった (Robison 1986; 白石一九九二)。

その次に注目されたのが、同じように経済成長時代の文脈であっても、大資本家の話ではなく、都市中産階級の台

頭の文脈のなかで捉えられる華僑・華人研究であった。東南アジアの都市人口の一定多数を占める「ニューリッチ」としての華僑・華人たちの新たな消費性向、政治志向について、社会学的アプローチを通じて、研究が進んだ (Robison et al. 1996; Shiraiishi & Pasuk 2008)。

## 5 台頭する中国とかわる東アジア国際関係

独立や革命といった「ナショナルリズムの時代」から「開発の時代」にかけて研究の主たる関心軸に変化があったものの、両者ともに華僑・華人は同じくナショナルな枠で研究されていた。研究上の枠付けに大きな変化が生じた一つの大きな要因は、一九八〇年代以降の前例のないスケールで増加する中国の「新移民」や東南アジア華僑の「再移民」である。ここでは、経済的、政治的に台頭する中国が注目的であり、したがって、こうした中国をめぐるダイナミズムのなかで、華僑・華人と中国との関係が改めて問い直されるようになった (Wang 1991; 山岸 二〇〇五: 庄 二〇〇一)。具体的には一九七〇年代以降に、中国から米国や欧州、豪州に移住した華僑・華人(新華僑)がその注目される研究対象となり華僑・華人研究、とりわけ、現代の事象を扱う華僑・華人研究については、東南アジア以上に欧米をその対象地とするものが急増した。そこでは、移

住したあとの社会的な受容／排斥の問題について、トロントやバンクーバー、メルボルンやシドニーといった新華僑が急増した欧米の街の文化的変容が大きな研究対象となった (Fong 2007; Skeldon 1994)。

中国の台頭、移住人口の規模の拡大、対象地域の拡大を通じて、一九八〇年代以降の華僑・華人を対象とする華僑・華人研究は新たな時代を迎えている。これまで華僑・華人を通じて、ナショナルなものを問うていた時代から、華僑・華人を通じて、トランスナショナルなものを問う研究潮流が顕著である。植民地期以前を理解するためにトランスナショナル、トランスリージョナルなものを理解するために、華僑・華人を研究対象としていたのと似た状況が再来しているとも言えるであろう。グローバル・スタディーズという言葉に合わせるならば、華僑・華人研究はグローバルな現象からナショナルな現象、そしていま、再びグローバルな現象を明らかにすることに焦点を当てつつ変化してきているといえる。

## II 華僑・華人研究における

### グローバル化「第二波」

それでは、現代のグローバル化はかつての植民

地期以前を対象とする華僑・華人研究とどこが異なるのだろうか。国民国家形成以前の時代のグローバルな現象、またその時代に焦点を当てた華僑・華人研究を、第一のグローバルゼーション研究群とするならば、中国の改革開放後の現代のグローバルゼーションによって生まれた数々の研究は華僑・華人のグローバル研究の第二の波によるものといえよう。では、以上の第一と第二の波の間にはどのような違いがあるのだろうか。その点を簡単に比較したい。

第一の違いは、移民の質に求められる。グローバル化の文脈で捉えられる華僑・華人についてとりわけ強調されるのが、移民としての華僑・華人であろう。第一のグローバル化の時代には、たとえば福建省や広東省における経済的困窮状況、移民先の英領マラヤや蘭領東インド、米国や豪州における鉱山開発といった労働需要、そして、両地を結ぶ航路やその前史となる商業ネットワーク、といったトピックが注目された。これらの研究に共通する前提は、移民の理由はあくまで経済的なものであり、商業や労働が動機であり、したがって経済史の研究が華僑・華人研究の最大の柱であった。対象となる華僑・華人はそのほとんどが青年壮年の男性であり、移民として取り上げられる移住とは、一生に一度か二度のことであり、ワン・ゲンウーの有名な定義によれば、「一時的な仮住まい」を意味する華僑の「僑」とは、場合によっては三世代を指す。このこと

は、当時の移動手段が船であることを確認すれば、納得がいくであろう。第一のグローバル化時代の移動のリズムは、一〇年、百年の単位を意味していた。第二のグローバル化、一九七〇年代以降を対象とする華僑・華人の移動の質と比較すると、移動の手段が主に飛行機に変わっているという以上に、まったく異なる動機、性別・年齢構成が容易に観察できる。移動手段の変化に伴い、移動のリズムは短縮され移動する人口は格段に増加した。この第二のグローバル化の時代における移民において、経済的動機は圧倒的なものではなくなり、留学を契機とする移民が急増した (Fong 2011; Louie 2004)。留学生一人につき、その面倒をみる母親、さらにはその父母といった形で、同一家族のなかで連鎖的に移民するケースも急増している。したがって、動機、契機が留学であった場合、留学生とその家族の総数で多いのは女性であり、年齢にしても若年層、また老年層が増えた。移民のリズムについても、留学を動機とすれば二年や四年が多く、多くの場合は一〇年未満である。つまり、この時代の華僑・華人にとっての移住というのは、かつてのような一生に一度のことではなく、ましてや数世代の話でもなく、一人のライフサイクルの中にくみこまれた移住である。とりわけ、現在の航空事情を前提にすれば、夫婦の一人が香港で、もう一人がシンガポールで平日は勤め、週末ごとに会うというライフスタイルも珍し

くはない。ジャカルタでは父親が会社経営をする傍ら、妻と子供、そして父母はシンガポールというケースもまた珍しくはない。時間距離が革命的に短縮したことで、グローバル化と移動の問題は大きく変化したのであり、第一のグローバル化時代と第二のグローバル化時代の華僑・華人移民とは、同じように長距離の物理的移動をしたとしても国籍などの社会的属性についても、移動している言語的・社会的空間についても大きく異なっている (Ong 1999: Ong & Nonini 1997: 白石・ハウ二〇一)。

二つのグローバル化の波についての第二の違いは、中国そのものの違いである。華僑・華人研究の中において、中国は常に特別な存在であった。中国こそが、華僑の輩出元(僑郷)であるがゆえに、とくに歴史研究としての華僑・華人研究では、中国は分析の始点となってきた。この点は大とえ東南アジア華人の再移民の問題が新たな研究課題として注目される現在も、基本的には変わらない。ただ、注意しなければならない点は、華僑・華人を理解する視座の始点としての中国とは具体的にはいったい中国のどこを、何を指しているのかという点が研究によって大きく異なるという点である。第一のグローバル化の時代を対象とする華僑・華人研究においては、中国とはなによりも、福建省と広東省の僑郷であった。華僑輩出地域は中国全土に広がっていたわけではなく、この二省に圧倒的に集中してい

た。したがって当時の中国と華僑の移住先との関係をグローバル化の中で捉える場合、必要な中国の理解はなによりもこの華南地域(広東省、福建省に加え、浙江省の一部、海南島も含む)についての理解であり、その出身地と移民先を結ぶ同郷会館等の組織、関係についての理解であった。なによりも移民を多く輩出する華南地域の社会経済、そして文化的な背景を理解し、僑郷と華僑を「つなぐもの」について分析することこそが、華僑・華人研究において中国を理解することであった。時には、福建省、広東省という省の単位ですら粗く、台山、香山、潮州、福清、というより小さな地理単位とグローバルな華僑とのつながりが研究されてきた (Hsu 2000)。

それに対して一九七〇年代以降、現在の華僑・華人研究において中国を理解することは中国の中でもはるかに広い地域の理解が求められる。急増する留学移民について考えるならばその輩出元は地理的には中国のほとんどすべての大都市が射程に入るだろう。交通事情が変わったこともあり、かつてのように、華南から東南アジアへという、海路を前提としたつながりはなくなり、空路でつながれば、中国のどこからでも簡単に移住できるようになった。成都からシドニー、昆明からシンガポール、北京からシカゴといった、第一のグローバル化の時代には考えられなかったルートが増えている。華僑・華人とグローバル化の関係に

において、中国は欠かす事のできない地理的分析対象であるが、第一のグローバル化と第二のグローバル化では、同じ中国でもそこには似て非なる中国、端的に言えば、中国Ⅱ華南から中国Ⅲ全土への広がりが生じているということがいえる。加えて、たとえ同じ地理的空間、つまり福建省や広東省からの現代の移民だとしても、その動機や移住の手法もまた大きく異なっている (Yow 2013)。華僑・華人研究は、現代のこの第二のグローバル化を通じてその対象範囲を大きく広げている途上にある。かつてのように、華南と東南アジアのリンクが地理的に広域なつながりとして他の事例を量のうえで凌駕していた時代はもはや終わっている。移民の出発地も、目的地も、そして移動の目的そのものも第二の波においては第一に比べて多様化した。したがって研究の視点もまた、現代においては急速に広げざるをえない状況にある。こうした実態状況に鑑みれば、否が応でも、華僑・華人研究はいままさにグローバル・スタディーズという枠を最大限活用して、再構築する必要が生じているといえるだろう。

## おわりに

華僑・華人研究にとって、グローバル・スタディーズの

広がりには、以上をまとめると、二重の意味で望ましい現象であるといえる。第一に、従来型の華僑・華人研究にとって、とりわけ、広域の経済史やディアスポラ研究としての華僑・華人研究を進めるタイプの研究者にとって、既存の制度的制約を取り除きより大きな器のなかに研究枠組みを埋め込む好機だからである。第二に、グローバル・スタディーズという枠は、現代のグローバル化に伴う華僑・華人そのものをめぐる環境の変化を正面から研究する場となるからである。一例をあげれば、一九三〇年代から六〇年代にかけてのインドネシアの華僑・華人を研究していたならば、東南アジア研究という枠では十分な枠組み、土台作りが可能であった状況から、仮に二〇〇〇年代、二〇一〇年代の華僑・華人の研究を行う場合には、その対象のライフスタイルが空間的に、地理的に広がったため、たとえば米国、豪州、アフリカ、日本などを射程にいれた、東南アジアでも東アジアでもなく、グローバルな枠組みを持つ必要に迫られている。加えて、従来と異なり、この広がりを結びつける「中国的なもの」がもはや存在しない、もしくはきわめて分かりにくくなっていることも大きな変化である。マレーシア華人として生まれ、オーストラリアで教育をうけ、米国で就職し、台湾人と結婚するような世代の「華僑」は言語空間で言えば、ずっと英語の世界の住人でありつづけているのであり、こうした「アングロチャイ

ニーズ」のダイナミズムを理解しようとするときに、「国内的なもの」そこに見出そうとしても、もはや焦点が実態とずれてしまうのである（白石・ハウ二〇一二）。

その意味で、特定の地域にとらわれない非国家アクターである華僑・華人を研究するに当たり、地域研究でも国際政治でもなく、その双方を包摂するグローバル・スタディーズの登場は、繰り返しになるが、まさに華僑・華人研究にとって絶好のチャンスだといえよう。

一方で、グローバル・スタディーズにとって、華僑・華人研究がその一翼を担うことにはどのようなポイントがあるだろうか。グローバル・スタディーズの特色はなによりも、その地理的空間の広がりや自由自在に伸縮させられる点にある。では弱点はなにか。それは、時間的な比較の軸を取りにくいという点にある。時間的な変化を見極めるためには、どうしても、地理的な枠を限定する必要がある。たとえば特定の国、特定の都市、といった地理的な焦点をさだめることで、通常は時間軸上の比較が可能となる。これは地域研究が得意なところであろう。したがってグローバル・スタディーズのように、空間の広がりや捉えられた点を活かしつつ、実際に何が新しく何が新しくないのであるかを見極める時間的な比較の軸を設定する手法を確保するのであれば、地域研究の蓄積を活用することが分析力を高めるためには欠かせない。こうした地域研究的な手法

と、特定の地域を越える分析の両者に長けた華僑・華人研究はまさにグローバル・スタディーズの長所を活かし、短所を補う役割を担うことができる。したがって、これまでの華僑・華人研究の蓄積は、グローバル・スタディーズにとっては、大きな柱を形成する力になるであろう。

グローバル・スタディーズの中で、移民研究はきわめて大きな研究の柱となるであろう。そうなったときにも、同じ移民でも華僑・華人には時代、空間を越えて、豊かな研究業績がある。空間的にも、移民先は全世界に広がり、移民の主体も、若年男性から老年女性まで幅広い（Crisso 2008）。時代として、植民地時代、ナショナリズムの時代、そしてグローバル時代、もしくは交通テクノロジーにおいて、帆船の時代から蒸気船、鉄道、道路、そして飛行機の時代と、あらゆる形での時間比較を可能とする事例がある。移民の目的も、労働や貿易、就業、留学、と実に多様に富んでいる。

こうしてすべての時間、空間比較を行ううえで、華僑・華人は研究対象を提供する。モノではなく、ヒトを研究するうえで、これだけの広がりをもつ研究を蓄積してきた研究分野は他にはみられない。その意味で、グローバル・スタディーズが、理論的な進化を目指すのであれば、華僑・華人研究がこれまで生み出してきた果実を活かさない手はない。

華僑・華人研究にとつてのグローバル・スタディーズ、グローバル・スタディーズにとつての華僑・華人研究双方にとつて、両者がそれぞれに学問的發展を目指すならば以上のように両者が不可分の関係にあることを理解することが欠かせない。今後、この点の理解が深まり、そのうえでこのチャンスお互いに活かせるようになることが、グローバル・スタディーズ、華僑・華人研究、互いの發展を左右することにあらう。

●参考文献

- 後藤乾一編（二〇〇二）『国民国家形成の時代』第八卷、岩波書店。  
佐藤百合（一九九二）「發展途上国のビジネス・グループ五  
インドネシア——サリム・グループ——東南アジア最大のコ  
ングロマリットの發展と行動原理」『アジア経済』三三三卷三  
号、五四—八六頁。  
白石隆（一九九二）『インドネシア——国家と政治』リポポート。  
白石隆・ハウ、キャロライン（二〇一一）『中国は東アジアを  
どう変えるか——二一世紀の新地域システム』二一七—二一  
中央公論新社。  
末廣昭（二〇〇六）『ファミリービジネス論——後発工業化の  
担い手』名古屋大学出版会。  
末廣昭・南原真（一九九二）『タイの財閥——ファミリービジ  
ネスと経営改革』同文館出版。  
臺灣銀行総務部調査課（一九一四）『南洋ニ於ケル華僑——支  
那移民』臺灣銀行。

陳達・南滿州鉄道株式会社東亞經濟調査局（一九三九）『南洋  
華僑と福建・廣東社會』第六卷、滿鐵東亞經濟調査局。  
東亞研究所・東亞研究所第一調査委員会（一九三九）『東南洋  
諸國の對支貿易』（丙第五九號D・參考資料・二ノ五）、東亞  
研究所。

南滿州鉄道株式会社東亞經濟調査局・岩隈博（一九四〇）『蘭  
領印度に於ける華僑』第四卷、滿鐵東亞經濟調査局。

濱下武志（一九九七）『朝貢システムと近代アジア』岩波書店。  
濱下武志（二〇〇六）『華僑・華人史研究をめぐる東南アジア  
と東アジアの連続と断絶』『東南アジア研究』四三卷四号、  
三三二—三四五頁。

滿鐵東亞經濟調査局（一九三九—一九四一）『南洋華僑叢書』  
全六卷、滿鐵東亞經濟調査局。

山岸猛（二〇〇五）『華僑送金——現代中国經濟の分析』論創社。  
庄国土（二〇〇一）『华侨华人与中国的关系』广东高等教育出  
版社。

Anderson, B. R. O. G. (2005) *Under three flags: Anarchism and  
the anti-colonial imagination*. Verso.

Chiot, D. & Reid, A. (1997) *Essential outsiders: Chinese and  
Jews in the modern transformation of Southeast Asia and  
Central Europe*. University of Washington Press.

Fong, E. (2007) *Chinese ethnic business: Global and local  
perspectives*. London & New York: Routledge.

Fong, V. L. (2011) *Paradise Redefined: Transnational Chinese  
students and the quest for flexible citizenship in the developed  
world*. Stanford, California: Stanford University Press.

- Furnivall, J. S. (1939) *The fashioning of Ieviahah: The beginnings of British rule in Burma*. The Burma Research Society.
- Furnivall, J. S. & Graeff, A. C. D. d. (1939) *Netherlands India: A study of plural economy*. Cambridge University Press.
- Gomez, E. T. & Hsiao, H.-H. M. (2001) *Chinese business in Southeast Asia: Contesting cultural explanations, researching entrepreneurship*. Curzon.
- Hau, C. S. & Kasian, T. (2011) *Traveling nation-makers: Transnational flows and movements in the making of modern Southeast Asia*. NUS Press. In association with Kyoto University Press.
- Hsu, M. Y. (2000) Migration and Native Place: Qiaokan and the Imagined Community of Taishan County, Guangdong, 1893-1993. *The Journal of Asian Studies* 59 (2): 307-331.
- Li, W. (2006) *From urban enclave to ethnic suburb: New Asian communities in Pacific Rim countries*. University of Hawaii Press.
- Louie, A. (2004) *Chineseness across borders: Renegotiating Chinese identities in China and the United States*. Duke University Press.
- Ong, A. (1999) *Flexible citizenship: The cultural logics of transnationality*. Durham: Duke University Press.
- Ong, A. & Nonini, D. M. (1997) *Ungrounded empires: The cultural politics of modern Chinese transnationalism*. Routledge.
- Reid, A. & Rodgers, K. A. (2001) *Sojourners and settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. University of Hawaii Press.
- Robison, R. (1986) *Indonesia: The rise of capital*. Allen & Unwin.
- Robison, R., Goodman, D. S. G. & Murdoch University Asia Research, C. (1996) *The new rich in Asia. Mobile phones, McDonald's and middle-class revolution*. Routledge.
- Rush, J. R. (1990) *Opium to Java: Revenue farming and Chinese enterprise in colonial Indonesia, 1860-1910*. Ithaca: Cornell University Press.
- Shirashi, T. & Pasuk, P. (2008) *The rise of middle classes in Southeast Asia* (Vol. v. 17): Kyoto University Press, Trans Pacific Press.
- Skeldon, R. (1994) *Reluctant exiles?: Migration from Hong Kong and the new overseas Chinese*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe.
- Skinner, G. W. (1957) *Chinese society in Thailand: An analytical history*. Cornell University Press.
- Skinner, G. W. (1958) *Leadership and power in the Chinese community of Thailand* (Vol. 3). Cornell University Press.
- Suehiro, A. (1996) *Capital accumulation in Thailand, 1855-1985*. Silkworm Books.
- Taglicozzo, E. C. W.-C. (2011) *Chinese circulations: Capital, commodities, and networks in Southeast Asia*. Durham: Duke University Press.

- Trocki, C. A. (1990) *Opium and empire: Chinese society in Colonial Singapore, 1800-1910*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Wang, G. (1991) *China and the Chinese overseas*. Times Academic Press.
- Yow, C. H. (2013) *Guangdong and Chinese diaspora: The changing landscape of Qiaxiang*. New York: Routledge.

● 著者紹介 ●

- ① 氏名……相沢伸広(あいざわ・のぶひろ)。  
 ② 所属・職名……日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究員。  
 ③ 生年……一九七六年。  
 ④ 専門分野・地域……地域研究・インドネシア、タイ。  
 ⑤ 学歴……京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(東南アジア専攻)。  
 ⑥ 職歴……政策研究大学院大学・助手(二〇〇六～〇七年)、日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究員(二〇〇七年～現在)。  
 ⑦ 現地滞在経験……インドネシア(二〇〇三～〇五年)、タイ(二〇一〇～一一年)。  
 ⑧ 研究方法……文献調査とフィールドワークを重ねることで、データの蓄積、研究テーマの確定、分析をすすめています。  
 ⑨ 所属学会……東南アジア学会、日本華僑華人学会、日本国際政治学会。  
 ⑩ 研究上の画期……二〇〇六～一三年タイ政治変動。タイの政治研究者達の洞察力、激動の政治動向において身を賭して政治分析を行う姿勢に接し、外国人が、とりわけ日本人が東南アジアの政治を研究する上で如何なる知的貢献が可能かという点を強く問うようになりました。  
 ⑪ 推薦図書……ハンナ・アレント『全体主義の起原』全三巻(大和久和郎訳、みすず書房、一九七二～七四年)。インドネシアのような新しい多民族国民国家の政治思想を理解する上で、その内容、研究方法ともに大いに参考になる古典だと思います。